

程、必須の環境条件、等の研究の蓄積が皆無に等しいことに気づかれ、テレビ原因説ひとつまともに批評する理論的蓄積すら無いことが自覚され得たことだろう。書評特集などを編んでいる暇など無い筈である。

この特集の執筆陣は会誌の編集委員たちである。

「一流」の論者を当てたことになる。宮下は生前、こう述べていた。——「私達の進めている仕事は確かに超一流なのです。そしてこれは、ただ『一流』と自他共に思っている連中が実は、本質的には怠け者で、学者としては、二流にも及ばない連中であるため、それだけの事です。」——。学界の水準を抜いたくらいでは、まだ道程のはじまりでしかないことを、宮下は良く知っていたのである。彼の先導なしで、私は、さ、どこまで進めるだろうか。

## 宮下さんのこと

内田 慶市

宮下さんと私の出会ひは、今から八年前、三浦さんを通じてでした。

その頃、大学院で、三浦言語論に拠つて中国語学の研究を行つてゐた私は、三浦さんに三浦さんの著作の中で疑問に思ふ所を質問したり、「代詞考」といふ拙い論文を送つて見て頂いたりする中で、宮下さんを紹介されたわけでした。

そして、『試行』に掲載された、「構造言語学の変形としての変形文法」と、「ポール・ロワイヤル文法の再発見」の二つの論文がどうしても読みたくなり、初めて宮下さんに手紙を書いてお願ひした所、宮下さんは、見も知らぬ私の願ひを快く承諾して下さい、次

のやうな言葉を添へて、論文のコピーを送つてくれました。

「どんな分野であらうと、またどの時代の人であらうと、通説を鵜呑にせず、対象と格闘してゐる人の姿が一番励みになります。御研鑽を祈ります。」

(一九七六・十・十九)

その後、宮下さんからの手紙類は、百通余りにも上り、論文も殆んど送つて頂きました。

又、上田さん、鈴木さん、黒川さんを紹介してくれたのも宮下さんでした。それまで、孤独感を抱きながら三浦言語論に基づいて言語研究を行つてゐた私にとつて、それは大きな励みとなりました。

今、宮下さんの手紙を読み返してみると、そこには、宮下さんの「生き様」がはつきりと反映されてゐるやうに思われます。常に物事(対象)と真剣に取組み、自他共に厳しく律しようとする姿が、そこには現れてゐるやうに思ひます。

「自ら問題を発見し、真摯に取組む限りは友が現れ、師が見付かるものです」(一九七七・四・十三)

このやうな言葉が到る所に見られ、ともすれば怠惰に陥りやすい私を、いつも叱咤激励してくれたものでした。

私が研究に行詰つた時には、次のやうに助言を与へてくれました。

「今のうちは、研究の進み具合にまだらつこしい思ひをなさるかも知れませんが、対象の輪郭を掴み対象の観察の蓄積がある水準に達すると途端に対象の方から大小の無数の問題を突き付けて来るやうになります。さうすると論文がどんどん展開し、どんどん具体化してひとりでは有機的に発展して行くかのやうな感じがする程です。常に対象の全体に注意しながら部分を吟味することが大切だと思ひます。リソゴの皮を剥くやうに全体を薄く剥きながら次第に芯に迫るべきだと思ひます。」(一九七七・八・八)

宮下さんは、又、イデオロギー等にとらはれず、対象と真向から立ちむかひ、その本質を明らかにしたもののこそ「よし」とする態度を一貫して貫いた人であつたやうに思ひます。

このことは、北見工大の宮下寄贈目録による宮下さんの幅の広い読書歴（東洋史、日本古代史、経済、農業、美術、児童文学、医療……）からもみることができ、私への手紙の中でも、しばしば、各分野の優れた業績についての紹介がなされ、大いに勉強させられると同時に、私達の陥りやすい、立場（世界観）の違いで、物事の優劣を判断するといふ欠点を反省させられました。

宮下さんは、このやうに、実に度量の広い、まさに豪傑といふ感のある人でしたが、その反面、非常に繊細で、優しい心も持ち合せた人でもありました。三浦さんが倒れられた時にも、次のやうな依頼文が来たことがあります。

「先生は、積極的に麻痺した手足の回復訓練に励んでおられますが、それに併せて精神的な応援も大事です。（中略）学問の話を聴き、話すのが何よりの励ましになってゐるさうです。（中略）そこで、大変勝手なお願ひですが、貴方から見た中国語学界の様子や貴方が疑問に思はれる事や、現在関心を持つて

研究なさつてゐる事等を簡単に結構ですから見舞をかねて先生に書送つて戴けませんか、先生にはもつと長生きをしてもつともつと仕事をして貰ひたいのです。私達の仕事振りを見て貰ひたいのです。」

（一九七七・四・十三）

私が『現代言語学批判』の分担執筆中に風邪と中耳炎で寝込んだ時、その後、肝炎で入院した時にも、毎日のやうに励ましの手紙や、病気に關する書物の紹介等を送つて貰ひ、本当に勇気づけられたものでした。

宮下さんの死の知らせは、京都の病院で二度目の入院中にうけました。何としても葬儀には参列したかつたのですが、医師の許しを得られずベッドの上から冥福を祈りました。

『英語文法批判』の出版を目の前にして宮下さんは逝つてしまつたわけですが、まさに仕事はこれからといふ時で、全く残念でなりません。宮下さんの遺志を受け継いで、英語学の根本的な批判・建設を行ふ人が現はれることを希求せずにはをれません。と同時に、私も、分野こそ違へ、同じやうな方法論で科学的な中

国語学の建設にむけて研鑽をつみ重ねていきたいと考へてをります。そのことが宮下さんへの私達遺されたものの唯一の供養となることだと思ふのです。

宮下さん、どうか私達を、私達の仕事をいつまでも見守つてゐて下さい。(一九八三年九月二十六日)

## 宮下眞二君の憶い出

滝村 隆一

私が宮下眞二君と知り合つてからの十数年間で、彼と直接会つて話すことができたのは、せいぜい四〜五回であつたらうか。それも私が浦和近辺にいて、上京のさい列車の乗り換えの大宮に近かつたということもあつたのであろうか、一〜二時間、私の家に寄つて話してすぐ帰るといったものであつた。決して親しいとはいえない間柄の私が、彼の憶い出を語るのはいく

ぶん気がひける。しかし、生前における彼の方からの全く一方的な好意に謝意を表する意味で、この小文を寄せることにした。

というのも、彼はつねに私の仕事を少なからぬ人々に紹介し喧伝しつづけてくれたらしいからである。例えば、「中学(あるいは高校だったかもしれない)のときの教師に、滝村さんの本を紹介したところ、それを教材の参考書に使つてくれるようです」とか、「新しい友人に滝村さんの本を読むようにすすめたら、世の中にはずい分スゴイ人がいるものだという感想を寄せてきました」といった類いの手紙を、何度か受け取つた記憶がある。そればかりか、確か七五〜六年頃だつたと思う。部屋に入つて座るなり、改まつた口調で、「滝村さんにお願ひがある」といい、「滝村さんの御仕事を欧米向けに英訳したいので、許してほしい」という申し出を受けたことがある。私が、それはいつのことですか、と聞くと、「十年位先のことです」と答えたので、私は即座に「そんなに先の話なら、そのときには新たに書き下しませう」といったのを、まるで